

フランスのクルディ監督を招いてドキュメンタリー上映会を開催しました

2016年1月30日 社会安全学部のある高槻ミューズキャンパスのミューズホールで、関西大学経済・政治研究所平成27年度第5回公開セミナー「逆境に負けずに生きる ドキュメンタリー『霧の向こう』上映会とフランス人監督との意見交換会 311 to 1113」を開催しました。

2015年11月13日にパリで発生したテロに揺れたフランスから、映画監督のケイコ・クルディさんをお招きし、福島第一原子力発電所事故の被災地で暮らす人たちの日常を描いたドキュメンタリー『霧の向こう』を上映しました。

上映後はクルディ監督を囲んでディスカッションを行いました。一般と学生合わせて320人が参加して、映画を鑑賞し、ディスカッションに参加しました。学生は社会安全学部生が大半でしたが、他学部の学生の姿も見られました。

東京で報道特派員だった父親から女優の岸恵子にちなんでケイコと名付けられたクルディ監督は、パリの大学で映画と日本語を学んだ後、東京大学大学院に留学し、京都造形芸術大学で教鞭を執ったご経験をお持ちです。

2011年3月11日に東日本大震災が発生した時、クルディ監督はフランスにいました。フランスで進行中のプロジェクトに取り組んでいたにもかかわらず、いてもたってもいられず日本行きの飛行機に飛び乗り、空席だらけの飛行機の中で「何が起きているの?」「日本は一体どうなるの?」と思い悩んだそうです。日本に着くと被災地に足を運び、1年かけて、ドキュメンタリー映画『霧の向こう』を制作しました。

映画は津波の映像、そしてクルディ監督のモノログで始まります。レンタカーで福島の現地を回って取材した人たちが映し出されます。家族を守りながら生活している女子高生。子どもへの影響を気にしながら暮らす母親。放射線量を計測しながら農産物を出荷する農家。フランス人の目から見た福島の現状がフィルムに収められています。クルディ監督が伝えたかったのは、映画のタイトルにあるように、すべてが霧の向こう側にあり、わかりにくいということだそうです。

上映後のディスカッションでは、クルディ監督は、堪能な日本語で、会場に集まった320人に語りかけました。2015年11月13日にパリで発生したテロについても語っていただきました。「事件が発生したレストランのすぐ近くに住んでいました。私の友人の友人も亡くなりました。テロで息子を殺された親が、かわいそうなのは犯人でもあると言っていました。フランスでは憎しみには憎しみをぶつけるのではなく、憎しみには愛情をぶつけるような心情があります」

最後に、学生たちへのメッセージとしては「旅をして下さい」「異文化に飛び込んで下さい」と話して下さいました。ケイコ・クルディ監督は、現在、福島に関するドキュメンタリー映画の第2弾を制作中です。前日まで、福島で撮影されていましたが、今回のセミナーのために撮影を中断して関西大学高槻ミューズキャンパスまでお越し下さいました。

感想文集：社会安全学部生を中心に関西大学のいろいろな学部の学生がこのセミナーに参加して、感想を寄せてくれました。

「1月30日、私は涙をこらえながらケイコ・クルディ氏が制作した映画『霧の向こう』を観た。その映画に映し出されていたのは、リアルな被災地の現状と、その被災地の問題解決に奮闘する様々な人々だった。」(社会安全学部 学生)

「日本で起こっている問題を、外国人であるクルディ監督だからこそ客観的にとらえることができる、という側面が、この映画をさらに良いものになっているとも感じた。」
(総合情報学部 学生)

「震災後の生活に気が滅入ることもある一方で家族との会話がそれを忘れさせてくれる、という話は、窮地に陥った人間にとってコミュニケーションがいかに重要か、というのを改めて認識させてくれた。」(システム理工学部 学生)

「映画を見るまで、被災地の人々は3.11の震災で悲観的になっているのではないかと感じていました。しかし、映画で出てきた女の子は明るく前向きで、でも家族のことや自分たちの生活のことをよく考えていて、私より年下なのにすごいと思いました。」
(社会学部 学生)

「第2 外国語でフランス語を履修しているので生のフランス語を聞いたことが嬉しかったです。日本人ではないケイコ・クルディ監督が真剣に311のことを考えている姿を見て、日本人である私はもっと真剣に311について考えるべきだと思いました。そして、旅行をしているいろいろな視点から世界を見ていきたいと思いました。」(商学部 学生)

「ケイコ・クルディさんがどれだけ日本を好きで本気で東日本大震災の問題に向き合ってくれているのかもよくわかった。」(文学部 学生)

「映画はとても素晴らしかったです。映画の内容が素晴らしかったというのがありますが、それ以上に、この映画の存在意義や価値がとても高いと思います。というのも、なかなか現地の方々の言葉を聞くことは難しいですし、被災地から離れた所に住んでいて、私のように3.11の事故を思い出すことなく生活をしている人々に、この事故のことを思い出させ、改めて考えさせてくれるからです。」(法学部 学生)

「11月13日に起こったパリのテロ事件について、ケイコ・クルディさんが、フランス人は「憎悪に対して、愛情をぶつけていた」と仰っていたことが非常に印象的で、あんな悲惨な出来事があったのにも関わらず、テロを起こした犯人たちに対して、愛情をぶつけ、憎悪が大きくならないように子供たちに教育されているというフランス人の考え方、そしてフラ

ンス人の根底にある哲学に驚きました。最後にケイコ・クルディさんが私たち若者に「留学や旅行をして、外の視点や違った角度から世界を見て欲しい」とメッセージをくださったので、海外旅行で自分の見聞を広げたいと感じました。本日、『霧の向こう』を鑑賞させて頂き、意見交流会にも参加させて頂き、自分の世界が広がったように感じます。」

(経済学部 学生)